

平成28年度 入学試験問題（第1回）

国語

(60分 満点：150点)

注 意

1. 指示があるまで開いてはいけません。

2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

3. 用具類の貸し借りは禁止します。

4. 指示があるまで席をはなれてはいけません。

5. 質問があればだまって手をあげて監督者を呼びなさい。

6. 問題用紙も解答用紙といっしょに出しなさい。問題用紙の
余白は下書きとか計算などに利用してもかまいません。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出しの問題に答える場合、特定の指示がない時には句読点・記号は全て一字とする)

瑞穂はトーコに勧められていた椅子に、ゆっくりと腰を下ろした。

「それで、瑞穂、^①折り入つての相談なんだけど。このエントリーの締め切りが迫っている。定員五名、補欠登録もできるけどね」
「うん、知ってる」

瑞穂も、俳句甲子園のことは自分で調べているのだから。

「それに対して、私たち同好会の会員は六名でしょ」

「うん」

^② 瑞穂は用心深く答えて、またエントリーフォームに目を落とす。トーコと視線を合わせなくてもすむように。

「それで、再確認なんだけど、俳句甲子園の大会規定を説明するね」

「あ、うん」

話はやっぱりこのことか。そろそろ出ると思っていたけど。

要領よく説明してくれるトーコの声にも ^③ □□の空で、瑞穂はあれこれ考える。

そう、俳句甲子園は、一チーム五名で参加する。

俳句同好会に入つた時から、実際のメンバー編成はどうなるんだろうと不安だつた。入会するまでわからなかつたけれど、瑞穂が入つた時、すでに五名の会員がいたのだ、

——私が入会したいって言わなければ、初期メンバーだけですんなりエントリーできていたんだ。余計者の瑞穂さえいなければ。

自分を余計者とは思えないようにしてきた。瑞穂は、自分で言うのも何だが、国語の成績は学年でもトップクラスだ。国語の文学史の授業を受けている時にクラスメートの反応を窺うだけでも、自分の知識はすごいとわかる。うぬぼれではない。『枕草子』や『徒然草』どころか『源氏物語』だつて読んでいる。原文じゃなくて、現代語対訳のだけど。でも、漫画で読んで『源氏』をわかつた気になつてるクラスメートとは一緒にされたくない。俳句だつて、一時期熱中していた。マイ歳時記を持っている高校生なんて、すごく貴重だと思う。

——そうかな。

瑞穂の心の中でもう一人の瑞穂がそうささやく

——^④ あんたは協調性ないし、俳句経験者と言つたつて、たいしたキャリアでもないじゃない。その証拠に、今日作つた句だつて、あんたより初心者的一年生の方が高評価なくらいだつた。

——それはともかく、瑞穂みたいに知識のあるメンバーは貴重なはずだ。順当にいけば、二年生三人——瑞穂とトーコと、ここにはいない会長の茜——と、三人の一年生のうちの二人をエントリーメンバーにするのがいい。

——だいたい二年生を差し置いて一年生がメンバーに入るなんて、そんなの……。

——はずれた二年生のメンツが立たないつて？ 情けない人間だね、瑞穂。

「……瑞穂？ 続きを話していい？」

「ん？ ああ、ごめんなさい、どうぞ」

自分一人の考えに夢中になつているうちにトーコの説明は終わつていたようだ。

「まだ締め切りには少し時間があるけど、そろそろスタメンは決定した方がいいかなつて」
ほら来た。

どうしてここに、会長の茜がいなんだろう。

——こういう話つて、役つきの会員がそろつて説得するものじゃないの？ 落とすメンバーには。

瑞穂の頭の中に、いろんな声が渦まく。

——でも、あんたが落ちるとはまだ決まつてないじゃない。

「うちの一年生三人のことなんだけどね」

トーコのきびきびした声で、瑞穂はまた現実に取り戻される。

「私たち、あの三人をA V D担当つて勝手に呼んでるんだけど」

「A V D？」

「そう。『A』はオーディオ、つまり音声担当。三田村理香。声に出した時の言葉の響きにすごく敏感で、センスがあるでしょ」

「そうね」

たとえば今日の練習でも、歳時記をめくりながら、突然理香はこんなことを言い出した。

——ねえ、『神田川祭の中を流れけり』つて、この句、すごく晴れ晴れしてますよね。それ、ア段の音がいっぱいあるからじゃないでしょうか。ほら、十七音の内九音もア段。だからとってもおめでたい感じなんだと思います。

——わかったわかった、理香。わかったから、実作に戻ろう。

トーコは軽くあしらったが、瑞穂には新鮮だった。音で俳句を楽しむなんて。

それを思い出しながら瑞穂は続けた。

「たしかに。それと、理香って声もすごく通って聞きやすい気がする」

「そうだね。あの子いい声してる。さすが、一人カラオケが趣味で、カラオケボックスにマイキーボードを持ち込んで弾き語りするのがストレス解消法って言うだけあるわ」

「ふうん」

理香とトーコはそんな話もできているのか。瑞穂は一度も一年生とプライベートな会話ができていないことに今気づいた。そう言えば、この間ほかの会員がカラオケに行くと言っていたつけ。でも音痴を気にしている瑞穂はこわってしまったのだ。

「マイクの使い方もうまいね。それがカラオケのおかげっていうのは笑っちゃうけど、大事な能力よね。俳句甲子園では互いに相手校の句を鑑賞して発表するのにマイクを使うから、そこでもたまして学校はやっぱりパフォーマンス力が欠けると思われやすいもの」

瑞穂は無言でまたうなずいた。認めたくないが、今抱えているこのネガティブな感情は嫉妬だ。

下級生相手に。⑤ 瑞穂の気も知らないトーコは、次の話を始めている。

「そして『V』はビジュアル担当北条真名。書道何段だったかな。とにかくそっちでも大会に出られるくらいの腕前で、視覚に訴える字面を選別できる」

「うん」

それもよく知っている。

真名は会員の句を毛筆で大きな紙に清書してくれる。それを遠くから見ると、たしかに印象が変わる句があるのだ。いつも自分のパソコンに句を作らためていた瑞穂には、これも ⑥ □□□ 体験だった。

「そして最後の『D』はデイブート担当、桐生夏樹。論理を組み立てるのが得意で人の言葉尻にも敏感。悪く言えば揚げ足取りが上手なだけなんだって本人は気にしてるけど」

「ううん、しゃべれるってことはそれだけで俳句甲子園には強いと思う。彼女、この間全校集会でクラス代表としてしゃべってたけど、たしかに全然あがってなかったし」

——俳句甲子園で勝利をおさめるにはどういう戦術がいいか。

新野先生が力説していたことだ。

——ポイントの第一は、鑑賞点をもぎとること。

トーコもあれを思い出していたらしい。

「新野が言っていた通りよね。鑑賞点がものを言う本番で、とにかく話し続けられる人間は強い」

瑞穂はじつとトーコの話を聞いていた。トーコの言うとおりでと思うけど、それにしても。

——私たち、ね。

その中に瑞穂は含まれない。茜会長とトーコは二人だけで、もう全部決めていたわけだ。

「そうだね、トーコ。私もそう思う」

⑦ 複雑な気持ちを押し隠して、瑞穂は静かにうなずいた、たしかに、一年生三人は強い戦力だ。ここで、私はどうなるのよなんて見苦しくわめくのは、情けなさすぎる。瑞穂にだってプライドがある。

「それと、やっぱりうちの主軸は会長の茜でしょ」

「うん」

これもそのとおりだ。須崎茜は、一見ふわふわしているが、俳句に関してはすごくシビアだし熱心だし、実際、王道の俳句を作り続ける。先生の言うポイントの第二、「七点の句」を。先週の練習試合でも、今日の作句でもそうだった。

瑞穂にはそれができない。教科書通りの句を作るなんて、かえって恥ずかしいと思ってしまう。自分にしか作れない、すごくとんがって、人を驚かすような句でなきゃ、作る意味がないと思う。

なのに、評価されるのは、「骨法正しい」と言われる須崎茜の句の方だ。

でも、いい。俳句甲子園でだって『骨法正しい』俳句は評価が高いんだから、須崎茜をはずすことはできない。

「これで四人。で、最後の一人なんだけど」

もういいよ、トーコ。

——こんなに丁寧に、外堀をじりじり埋めるみたいにして、わたしがいかに知らない人間か説明してくれなくてもよかったよ。そんなこと、もう最初からわかってたから。

一年生三人の能力も、茜会長の才能も、いまさら確認してもらわなくなってたってわかった。そして、このトーコ。

俳句は初心者だと言うし、たしかに句はぱつとしないが、夏樹に負けなくらいしゃべりは得意だし、頭の回転の速さは夏樹以上。対戦時間の短い俳句甲子園——鑑賞時間は一句につき、たった三分（決勝戦をのぞく）——で、一番鑑賞点獲得に貢献できるのはトーコに間違いない。

つまり。

——私、井野瑞穂はいい人間だ。

別に、こういう経験は初めてじゃない。

自分がすごく得意なジャンルだ、みんなに認められてるって思っていたフィールドで、気がつけばだれにも相手にされないかまわない。俳句を続けたいて思ったのは、俳句続けてますってアピールしたい人がいるからだ。瑞穂はその人となりが続けるために俳句をやっているのだ。俳句甲子園なんかどうでもいい。

そう思おうとするそばから、別の自分がささやく。

——どうでもよくはないでしょ。俳句甲子園に出ますって言ったら、きつと応援してくれる、褒めてくれる、そう期待したのも事実じゃないの。

「……だから瑞穂、お願いね」

「え？」

しばらく、トーコの言葉の意味がわからなかった。

それから、目を丸くしてトーコを見る。

「トーコ、今何て？」

「瑞穂、五人目のメンバーになって。実際に試合での順番を決めるのはもう少しあと、実際に句がそろうまで延ばすけど。顧問の意見も聞かないといけないしね」

「ちよつと待つて。じゃ、トーコは？」

瑞穂はまだトーコの提案に半信半疑だ。だが、トーコはあつさり答える。

「私は補欠に回る」

「どうして？」

「私は創作ができない人間なの」

「そんなことないよ、みんな初心者なのは一緒じゃない」

ちよつと⑧心にもない言い方かな。でも、全くの嘘でもない。瑞穂も自信をなくしかけているところだ。

トーコは不思議な笑い方をした。

⑨「酷だなあ、瑞穂」

「え？」

「瑞穂にはわからないか。世の中には、そういう才能がない人間もいるんだよ」

「俳句を作るのにそんな特別な才能なんて必要かなあ」

長編小説を書くわけではないの。ところが、トーコの目がきびしくなった。

「できる人間にはわからないのかな。さかあがりができない人間は、自分がどうしてできないのか説明できないでしょ。それと同じだよ。音痴の人間にどうして音はずしちゃうのよって聞くのは酷じゃない？」

瑞穂が返事を探している間に、トーコはさっさと出て行ってしまった。

（森谷明子『春や春』 二〇一五年 光文社 一部改変した）

問一 傍線部①の内容を最も簡潔に述べた一文を「トーコ」の会話文から抜き出し、初めの五字を答えなさい。（「」は入れないこと）

問二 傍線部②のような表現の仕方を何といいますか。解答欄に合うように漢字二字で答えなさい。

問三 傍線部③の空欄に入れるのに適切なひらがな二字を答えなさい。

問四 傍線部④とありますが、そのことを表すエピソードが書かれた段落を探し、初めの五字を答えなさい。

問五 傍線部⑤とありますが、「トーコ」は「瑞穂」のどのようなことに気づいていないのか、その内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が余計者であることは誰よりも自分が一番よくわかっているのだから、早く結論を言ってほしいと思っていること。
イ 下級生と上手くコミュニケーションが取れているトーコに対して、自分はそんなこともできていなかったと反省していること。

ウ 自分よりも優れた特技を持つ一年生に対して、二年生である自分が負の感情を抱いていることに気づいてしまったこと。

エ 自分をさしおいて一年生とトーコが仲良くしていることを聞き、一年生に対して焼きたくもない焼きもちを感じていること。

問六 傍線部⑥に入れるのに適切な表現を本文から探し、適切な形に直して、三字で答えなさい。

問七 傍線部⑦とありますが、その内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一年生がみんな自分よりも優れたところがあるのは頼もしいが、その一方で自分が俳句甲子園の選手として入り込む余地がないことを思い知らされてがっかりしている。

イ トーコは一年生の特長を正確に捉えておりしっかり分析できているが、自分のことをいっそうに取り上げてくれないことにいらだちを感じている。

ウ 一年生三人の戦力には期待しているけれども、プライドを傷つけられた自分もただ黙ってみているわけにはいかないと闘志を燃やしている。

エ トーコの分析は賛同できるものであるけれども、俳句甲子園の選手を決めるのにトーコと茜だけで話を進めているらしいことに釈然としないものを感じている。

問八 空欄Xに入れるのに適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 塞翁が馬 イ 井の中の蛙 ウ とらぬ狸の皮算用 エ 虎の威を借る狐

問九 傍線部⑧とありますが、その内容として最も適切なものを記号で選びなさい。

ア トーコは創作が苦手であることをよく知っているのに、補欠に回る理由をわざとらしく聞いてしまったこと。

イ 自分が選手になるよう提案されて嬉しいのに、トーコにも選手になる資格があるように言ってしまったこと。

ウ 俳句経験者であるという自負が多少なりともあるのに、自分も含めてみんな初心者であると言ってしまったこと。

エ 創作力に劣るトーコが補欠に回るのは当然と考えていたのに、口ではそのことを納得していないかのように言っていること。

問十 傍線部⑨で「トーコ」が言いたかったこととして最も適切なものを記号で選びなさい。

ア 自分でもどうしていいかわからないようなことに対しての励ましは、むしろ傷に塩を塗り込むような残酷な仕打ちであること。

イ 才能のある人間は時として周りを思いやる気持ちに欠ける傾向があり、瑞穂も知らず知らずのうちに人を傷つける残酷な言葉を発してしまうこと。

ウ そんなつもりではなかったとしても、才能のある人間が才能のない人間を見下すことほど残酷なものはないということ。

エ 創作する才能のない人間に対して、俳句甲子園に出場する資格があるような言い方をして期待を持たせるのはかえって残酷なこと。

「膝ってどこ？」と尋ねると「ここに決まってるだろう」と膝頭を指します。「じゃあ、肩は？」というと「何いつてるの、ここですよ」と肩峰を指す。現代人にとっては、これが当たり前の感覚です。

しかし、「子どもを膝に乗せる」というときに、膝頭に子どもを乗せる人はいないし、「肩が凝る」というときに肩峰が凝るという人もやはりいない。

日本人にとっての「膝」とは、膝頭から腿の付け根、太ももの前側全体をいったし、「肩」とは肩峰から首の回りまでを全部ひくくめて肩とっていました。

すなわち日本人にとっての身体は、膝頭や肩峰のようなポイントではなく、膝のあたり、肩の回りという「かいわい界限」だったのです。解剖学的な膝頭や肩峰という「ポイントとしての身体」に対し、「界限」に代表される「おおざっぱさ」が^①日本人の身体言語の基本です。

「おおざっぱ」なのは身体の部位の話だけではありません。

子どもの頃はうちには体温計というものがありませんでした。朝、学校へ行く前に「熱があるみたい」というと、母や祖母がおでこをさわり、「ああ、このくらいなら大丈夫」と（X）を叩かれ学校に追われました。怪我をして血が出て「このくらいつばをつけておけば平気」と、いい加減な手当てをされたし、海でおぼれそうになって（小さな漁村で育ったので）やつのことで浜辺まで泳ぎ着きゲーゲー吐いたときだって「少し寝てれば治る」と砂浜に放置されました。

あまり細かいことは気にしない、これが少し前の日本人でした。

現代の身体に対する志向はこの逆に向かっています。

膝が膝頭に、肩が肩峰になるというポイント化だけでなく、病名や怪我の名も細分化されていく。むかしは（少なくとも一般人にとつては）風邪とインフルエンザの違いはなく、ただの下痢と過敏性腸症候群との違いもなかった。

むしろ細分化にはいいこともあります。いいことがあるどころか、たくさんあります。しかし、細分化と医学の進歩は、安易なネーミングと^②そのネーミングに引きずられる盲信という危うさもはらみます。

数年前に「肉離れ」というものを体験しました。寒い舞台の上に九十分ほど座っていて突然走り出したら、右ふくらはぎの上部でプチッと音がして激痛が走ったのです。ふくらはぎが痛くて歩けない。整形外科と整復院の診断はともに「肉離れ」。全治四週間などという

知人の外科医に電話で聞いても同じような答えでした。

しかし、二日後には舞台があります。四週間も待てません。

そこで、まずは「肉離れ」という診断名を無視することに決め、（Y）に聞いてみた。詳しいことは省略しますが、まず塗り薬と飲み薬は使わないことにし、先生方からいわれたことも一応忘れることにしました。そして、（Y）に尋ねつついろいろやって、結局は二日後の舞台を無事に勤めることができました。

整形外科と整復院の先生は私のふくらはぎの状況を見て「肉離れ」と診断しました。彼らの頭の中で、チェックリストがひとつひとつチェックされているさまが想像されます。それによってもっとも「正しい」と思われるネーミングをした。するとそれから先は私の足を見ることよりも「肉離れ」というネーミングに引きずられ、その結果を盲信し、「肉離れ」に対する治療だけが始められます。

いま目の前にある「その人の足」という個別の状況が忘れられてしまうのです。

これはお医者さんだけではありません。自分自身もそうです。自分のからだに尋ねるよりも、お医者さんや本にきく。^③自分の身体を

他人に任せて、言いなりになってしまします。

そして、こういうことに何の疑問も抱かないし、むしろそれが当然だというのが現代人の感覚です。

しかし、^④これは日本人にとってはかなり新しい感覚なのです。

古い日本語の「からだ」というのは死体という意味でした。生きている身体は「み（身）」と呼ばれ、それは心と魂と一体のものでした。やがて、生きている身体が「からだ」と呼ばれるようになったことで、からだは自分自身から離れ対象化されるようになります。そうすると、自分自身との一体感が薄れるので、専門家である他人の手に委ねても平気なようになるのです。

それだけではありません。「からだ」の語源である「殻」のように、自分の周囲に強固な境界を設け、他人との壁を設けるようなものになります。

このような壁が強いと、能をはじめとする古典芸能のほとんどは演じることができません。古典芸能は、楽譜も曖昧なものだし、指揮者もいない。お互いの呼吸で合わせていきます。しかも、その場その場で。

ある能楽師が、若いころ生活が苦しいので企業に勤めたそうなのです。ところが毎日乗る満員電車。目の前に女の子の顔がある。化粧の匂いもする。それで何にも感じなくするためには、周囲を感じるという感覚をシャットアウトしなければなりません。他人がいても、いないがごとき精神状態が求められるのが満員電車での通勤です。

しかし、そんな生活を続けていたある日、舞台上で相手の呼吸や雰囲気を感じられなくなっていたことに気づいたそうなのです。^⑤そ

れでは古典芸能はやっていけません。そこで彼は生活の苦しさは諦めて、会社を辞めることにしたそうなのです。

他人との境界が曖昧であれば、^⑥ 人の苦しみは我が苦しみであり、人の喜びは我が喜びとなります。

また、他人とだけでなく、自然との境界も曖昧になるので、自然とも共鳴ができます。「おくのほそ道」の本で、日光の杉並木から漏れてくる日の光に感動し、人生が変わったという人の話を聞きました。私たちの周りには、私たちの生き方すらも変えてしまうほどの自然や、そして人がたくさん存在しています。

現代は、それらに対して、あるいは目をつぶり、あるいは拒否し、いよいよ「孤」の道歩んでいるように感じます。これはとてももったいないことだと思うのです。

このような現状は、明治の人たちが初めて目覚め、そして志向した「自我の確立」という方向の行き過ぎた結果なのかもしれません。

(安田登『日本人の身体』 二〇一四年 筑摩書房 一部改変した)

問一 傍線部①の内容を述べた部分を、文中から十四字で抜き出さない。

問二 空欄Xに入れるのに適切な言葉をひらがなで答えなさい。

問三 傍線部②の内容を具体的に述べたものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「肉離れ」と診断した時点から、医師は「肉離れ」以外の可能性を遮断し、他に悪いところがないかどうかを確認する手間を惜しんでしまう。

イ 「肉離れ」と診断した時点から、医師は患者の個別的状況よりも「肉離れ」をいかに治療するかに重きを置くようになってしまう。

ウ 「肉離れ」と診断した時点から、医師は患者に興味を失い、「肉離れ」を直せるか否かだけに自分の医師としての名誉をかけるようになる。

エ 「肉離れ」と診断した時点から、医師は自分の本来の使命を見失い、患者の心の状態を考慮せずに、身体的に治療することに専念してしまう。

問四 空欄Yに入れるのに適切な言葉を文中から六字で抜き出さない。

問五 傍線部③とありますが、その理由について述べた部分を含む段落を探し、初めの五字を答えなさい。

問六 傍線部④とありますが、筆者がこの感覚の出発点と考えているものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「生きている身体」を「身」と呼んでいたころ。

イ 「殻」から「からだ」という言葉ができたころ。

ウ 「自我の確立」を目指した明治時代。

エ 風邪とインフルエンザを区別するようになったころ。

問七 傍線部⑤とありますが、その理由について述べたものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 芸術よりも生活の苦しさを解決する方を重視する考え方は、芸術性を高めることに価値を見出す古典芸能とは相いれないから。

イ 他人がいてもいないがごとき精神状態は、舞台上の演者が観客とともに作り上げる古典芸能を演じるのに邪魔になってしまいうから。

ウ 他者との間に強固な壁を設けることに慣れることは、相手の呼吸や雰囲気とその場で感じなければいけない古典芸能を演じるにあたつて致命的な欠陥になるから。

エ 周囲を感じる感覚をシャットアウトする自己中心的な考え方は、他者との協調によつて芸術性を高める古典芸能とは正反對のものだから。

問八 傍線部⑥とありますが、それは他者と何をしていると言うことができますか。文中から適切な言葉を抜き出しなさい。

問九 傍線部⑦とありますが、そうなるってしまうのは現代人がどのようなことをしているからだと言ふと筆者は考えていますか。「くこと」につながる形で文中から二十五字以内で探し、初めの五字を答えなさい。

問十 本文に述べられた筆者の考えと一致するものを選び、記号で答えなさい。

ア 日本人の身体に対する感覚がポイント化細分化したことにより、疾病を治療しやすくなったが、そのために取り返しのできない事態も生じている。

イ 病気はいつでも自己判断をするべきであり、医者に相談すると個人の状況がないがしろにされるのが常なので、専門家だからといって信頼してはいけない。

ウ 他者や自然との境界を作らずに一体となる感覚を磨くことによつて、日本人はみな古典芸能を鑑賞する能力を取り戻すべきである。

エ 日本人の身体に対する感覚の変化はよい面もあるが、生き方を変えるほどの人や自然と出会う機会を失うことにもなつており、もったいない。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出し・要約の問題に答える場合、句読点・記号は全て一字とする)

「所有」は、文明の発達とともにつくられた、^①□□的な概念のひとつだと言つてもいいでしょう。言い換えれば、人間の頭の中にだけ存在する感覚だということです。でも、現実には僕たちが社会生活を営むうえでは「便利」な概念だし、現代社会では「必要」な感覚にもなっています。(A)、それは、あくまで「便宜上」の概念であり、^②命の「本質」ではありません。そういう感性を持つていることも大切なことなのではないかと思ひます。

僕たちの「所有」の感覚が、「お金」の存在によつて、より強固なものにされているのは間違いないでしょう。いま、日本でも世界でも、サービス産業の比率がどんどん高くなつてきています。洗濯、掃除、日常食、介護など、以前は職業としての成立が難しかったものも、今では立派に産業の一翼を担っています。職業として成立するものが増えているということは、(X)に換算できるものが増えているということです。

(X)に換算して考える癖がつくと、^③つい、なんでも「所有」しているように勘違いしてしまひやすくなります。いい例が「土地」でしょう。地球の上に勝手に線を引いて、「ここは俺のものだ」と威張つているのがいまの人間です。そして、その土地の値段が上がつたと下がつたと云つては、^④一□一□しています。

同じ土地には、草や昆虫や小動物をはじめ、いろんな生き物が生活しています。彼らから見たら、僕たちのやっていることはさぞかし変なことに見えるに違ひありません。僕たちが、歴史を勉強しているときに、「昔の人は変わったことをしていたんだなあ」と考えることがあるように、(B)一〇〇〇年先の人から見れば、^⑤今の人類はとても変なことをしているのかもしれない。

「所有」だと考えると、とたんに我々の^⑥アシヤは狭くなります。自分が「得をするか」とか、「損をするか」というようなことばかり考へて、社会全体の利益になるか、それとも環境破壊などを起こして不利益になるか、などということにまで気がまわらなくなります。

(C)、みなさんは^⑦川や山が誰のものか知っていますか？ 日本の場合、基本的に川は国や自治体などが管理する、いわゆる共有財産で、山には、個人の場合も団体の場合もありますが、基本的に所有者や管理者がいるのだそうです。

日本は世界的に見て、水に恵まれた国です。それでも、夏になると水不足が心配されるとか、実際に水不足になつて取水^⑧セイゲンが始まつたなどのニュースを耳にします。川の水は、^⑨インリヨウ水や生活用水としてだけでなく、農業用水や工業用水としても大変貴重で、なくてはならないものですから、少し不足するだけで大きなニュースになるのです。その川の水も、一時、家庭排水や工場排水で汚染が進み、大きな環境問題になつていた時期がありました。それが、大勢の人の地道な努力によつて、今では大幅に改善されてきまし

た。とてもありがたいことです。

(D)、山はどうかでしょうか？ 林業の衰退もあって、山はとても荒れていると言われています。言葉としては、木材資源を生産する場としての山が荒れているという意味が中心ですが、^エタクチ開発や過剰な土砂の採取で山そのものがなくなっているたり、廃棄物で土壌汚染が進んでいるたり、という意味もあります。山は誰かの所有物だったり、管理者がいるので、有名なところは別に、あまり「みんなで何とかする」という話にはなりません。「山」が「^{もつ}儲け」につながらなくなれば、誰も手を入れなくなり、どんどん荒れてゆきます。また、「山」としては荒れてゆく方向であっても、それが儲けにつながれば「利用」が進みます。

昔は、里山や川は地域に恵みをもたらしてくる「 Y 」と^オニンシキされていることが多く、人々は、大切に大切にその維持管理に努めてきました。山や川を荒らすような勝手な振る舞いは許されませんでした。日本の山や川が近年まで豊かだったのは、そういう地道な努力があったからです。

山は荒れても、せめて川が無事で良かったと言いたいところなんです、よく考えてみると、川の水は山でつくられています。山に降った水が集まることで川ができてゆくのですから、その「荒れ」を防ぐのはとても難しい。そういう状況が続いています。日本の「良質の水」を求めて、外国資本が「山」を買い占める動きがあるという報道もありました。^⑦日本の川がこれからどうなっていくのか、少し心配です。

【日本だけではありません。地球全体の環境問題も喫緊^{きつじん}の課題になってきています。ものを「所有」することによって「儲ける」という発想で突き進んできた結果、地球環境は限界に近づいてしまっているのです。

でも、世の中を大きな循環だととらえ、どんなものでも「一時的に借りているだけだ」と考えると見え方が変わってきます。服でもカバンでも車でも家でも毎日食べる食品でも、さらには自分自身の命でさえ、ありがたく受け取って大事に使い、次のところにきちんと渡さなければいけないという発想が出てきます。長い目で見れば、それが一番自分にとって「得」なことだし、全体の利益にもかかいます。本当は、生物学的に見ても社会的に見ても、「ひとりだけの幸せ」はあり得ません。地球に生まれた命の一部として、また、人間社会の一員として、僕たちはずっと「シェア」してきたのだし、「シェア」する以外に生きる方法はないのです。すなわち、「ひとの幸福」は「自分の幸福」であり、「共に豊かになる」ことでしか、自分を豊かにすることはできないということです。

最近、若い人を中心に、ボランティア、リサイクル、譲り合い、シェアハウスなど、「共有」や「シェア」という言葉につながる動きが活発に見られるようになりました。これから時代の進行とともに、まだまだ新しい「共有」の形が生まれてくる気がします。

少子高齢化、人口減少、産業構造の変化、経済のマイナス成長……、僕たちは、これまで誰も経験したことのない社会に突入してゆくこ

うとしています。僕たちは、まぎれもなく^⑧時代の転換点に立っています。今ほど、従来の発想にとられない、新しいアイデアが求められている時代はないでしょう。若い人たちへの期待は増すばかりです。】

(南野忠晴『シアワセなお金の使い方 新しい家庭科勉強法2』 二〇一五年 岩波書店 一部改変した)

問一 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直さない。

問二 空欄A～Dに入れる言葉の組み合わせとして正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|--------|---|------|---|------|
| ア | A | すなわち | B | もしかしたら | C | そして | D | むしろ |
| イ | A | しかし | B | すなわち | C | せめて | D | もちろん |
| ウ | A | すなわち | B | しかし | C | 一方 | D | ところで |
| エ | A | しかし | B | もしかしたら | C | ところで | D | 一方 |

問三 空欄Xに入れるのに適切な言葉を文中から二字で抜き出しなさい。

問四 傍線部①の空欄に入れるのに適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 具体 | イ | 抽象 | ウ | 積極 | エ | 消極 | オ | 楽観 | カ | 悲観 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問五 傍線部②とありますが、筆者はそれをどのように考えていますか。【 〃 】の中からそのことについて述べた部分を四十字で探し、初めの五字を答えなさい。

問六 傍線部③とありますが、その結果人はどのような考え方をすると筆者は考えていますか。そのことについて述べた一文を探し、初めの五字を答えなさい。

問七 傍線部④の空欄に入れるのに適切な漢字を答えなさい。

問八 傍線部⑤とありますが、今の人類は具体的にどんなことをしていると筆者は言っていますか。本文から一文で探し、初めの五字を答えなさい。

問九 傍線部⑥とありますが、日本の山や川の現状について述べたものとして本文と一致するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 川の環境問題が大勢の人の努力によって改善されたのは、所有者が個人から自治体へ変わったからである。

イ 今山は林業の衰退によって荒れてきているが、所有者や管理者の地道な努力によって改善されつつある。

ウ 山も川も人類の貴重な財産であり、所有者が誰であろうと保全に努めるべきであり、それが十分にできていない現状は嘆かわしい。

エ 山は所有者や管理者がいるため、みんなで何とかするという話になりにくく、どんどん荒れていっているというのが現状である。

問十 空欄Yに入れるのに適切な言葉を空欄Yより前の本文から抜き出しなさい。

問十一 傍線部⑦とありますが、その内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 川はこれまで無事であり続けて来たけれども、外国資本が「山」を買い占めることによって川にどんな影響があるかを予想するのは難しく、安心できない。

イ 外国資本が「山」を買い占める動きは、いずれ「川」にも移行してくることは明らかであり、そうになると今までの環境改善の努力が無に帰する可能性が否定できない。

ウ 「良質の水」を求める外国資本によって、山のみならず川までもがいずれは所有物として扱われるようになり、荒れが進んでいくことが予想される。

エ 外国資本も参加し、所有者がいることによって山の荒れが進む現状は改善される様子は見られず、その影響でいずれは川も荒れていくことが懸念される。

問十二 この文章の【 】の部分で、傍線部⑧の「時代の転換点」という表現に着目して、八十字以上百字以内で要約しなさい。

※印らんには何も記入しないこと。

受験番号	
氏 名	

評 点
※

11

[illegible]

--	--

問九	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
問十	問八					法	

11

問十二										問十	問八	問七	問六	問五	問二	問一									
												一			問三	エ	ア								
																オ	イ								
													一												
																				問十一	問九				ウ
																						問四			